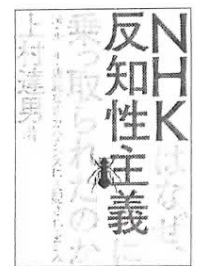


マスコミ

今年も戦後七〇年。政府・自民党のメディア規制批判が強まる中、上村達男

『NHKはなぜ、反知性主義に乗っ取られたのか』(東洋経



済新報社)を読むと、経歴に問題ない(むしろ立派な経歴をもつ)人物を公共放送のトップにすえるという考え自体間違っていないにしても、神輿は軽いほうがいいとよく言われる事態に見事にはまった感が否めない。さらには組織ジャーナリズムの欠点が浮き彫りにされている。

阪井宏『報道危機の時代』(花伝社)は『報道の正義、社会の正義』(二〇一三年)に続き、学生、現場記者、識者の三つの視線からジャーナリズムの役割を真正面から捉えている。また古木杜恵『沖繩 本土メディアが伝えない真実』(イス

ト新書)は沖繩というもう一つの社会ほど権力の暴走を招くのか』(山本知子+相川千尋訳、原題は「メディアを救え」、徳間書店)は、

メディアと東アジア(勉誠出版)は十三名の著者で、日本の大衆文化を中心にアジアで越境するメディア文化論とジャーナリズムの議論という二部構成をとっている。東アジアリージョナル放送空間の構築に向けて本書が刊行された意味は大きい。相手を認め合うまでに多大な時間を要するであろうが、時空を越えなければ実現しない。

『ドラッグネット 監視網社会』(三浦和子訳、祥伝社)を読むと、IT産業に集中化する富と社会の発展が人間をいかにモノ扱いにしているか、人間の思考形態を規定化しつつあるか、「あなた達を守る」という甘い言葉の危うさを改めて考えさせられる。

組織ジャーナリスト

の欠点が浮き彫りに

鈴木 雄 雅

昨年「二人の吉田」報道に揺らいだ朝日新聞社の行く末を憂えるのは、徳山喜雄『朝日新聞問題』(集英社新書)と朝日新聞記者有志『朝日新聞 日本型組織の崩壊』(文春新書)の二書である。両書とも朝日の現役記者らが書いている

いる(徳山、第5章)。徳山は「原点に帰れ」と言い、有志はジャーナリズム論より、「沈みゆく朝日の病巣」の分析を試みている。そうではあっても、戦前、戦後を通じてこの国を支えてきた新聞メディアが大きな曲がり角に立っている現状を如実に表している。

『報道危機の時代』(岩波)は再生できるか』(岩波)は再生できるか』(岩波)は再生できるか』(岩波)

フランス・メディアを中心とした世界で起きているメディア危機と既存社会(民主主義)の崩壊をどう乗り越えるか、を問う。

『越境するメディアと東アジア』(五洲出版)は、

『越境するメディアと東アジア』(五洲出版)は、

『報道危機の時代』(岩波)は再生できるか』(岩波)は再生できるか』(岩波)

『越境するメディアと東アジア』(五洲出版)は、

『越境するメディアと東アジア』(五洲出版)は、

『越境するメディアと東アジア』(五洲出版)は、

『越境するメディアと東アジア』(五洲出版)は、

『越境するメディアと東アジア』(五洲出版)は、

天野 1.15
1.3120
0.8)

